



史跡の豊かな山里 鹿角の小集落

黒保根町下田沢鹿角地区は、赤城山一ノ鳥居の東に位置し、県道62号線沿いの500メートル程の間に存在する小集落である。戸数は19戸、人口は41人、この小さな山里に、日本の近代化に関わる数多くの史跡が残されている。

県道62号線は沼田から会津へ抜ける沼田街道と大間々から足尾へ向かう銅山街道とを結ぶ道で、かつて利根村の繭を大間々宿へ運ぶ“シルクロード”であったと言う。そのせいもあって鹿角の集落には大型の養蚕農家が立ち並んでいる。

この土地から明治初期に日本の生糸の不評を払拭し、初めてアメリカへの生糸の直輸出を実現した新井領一郎を輩出している。領一郎の孫にあたるのが、ライシャワー駐日大使の夫人となった松方ハル。第二次世界大戦の時、ハルは戦火を避けて祖父の生家に疎開した。当時、家は取り壊されており、残された蔵に住んでいたというが、疎開中のハルには多くのエピソードが残されている。現在この場所は、ハルの実妹松方タネが創立した東京の西町インターナショナルスクールの校外学習施設「新井領一郎キャンプ」となっている。

また、自由民権運動に身を投じ、熱血の代議士と言われ、四国の多度津から出港した客船の中で謎の失踪を遂げた新井毫（ごう）が生まれたのも鹿角である。

新井毫の生家をはじめとする養蚕農家を偲ばせる民家群、西町スクールには曳き移転した大型民家の整備が進み、地元小中学校との新たな交流が期待される。昔日と変らぬ長閑な風情で心安らく鹿角地区だが、掘り起こせば日本の産業や政治を動かした人物や歴史に行き当たる奥の深い風景を形成している。



所在地 桐生市黒保根町下田沢鹿角
地区会長 大川 修明